

さよならが怖くて、それでも

二年 鈴木妃茉莉

新しい命と出会う時、心の中にふわりと新しい風が吹く。私がうさぎと出会った日は、まさにそんな日だった。きっかけをくれたのはうさぎが大好きな母だった。母はこれまでに三匹もうさぎを飼ったことがあり、「またうさぎと暮らしたい」とつぶやいた。その言葉から我が家にうさぎを迎える話になった。

でもその時、私は心のどこかで迷っていた。うさぎを飼うことに素直に喜べなかったのは、ある別れの記憶があったからだ。数年前、祖母の家で飼っていた犬が亡くなった。小さい頃から長期休みのたびに会いに行つて、たくさん遊んで、私はその子のことが大好きだった。犬は私にとつてもう一人の家族だった。だからこそ亡くなったと聞いた時、私は息をするのを忘れるくらい泣いた。もう会えない事実が胸に突き刺さった。

祖母の犬との別れが、まだ心の奥に深く残っていた。だからうさぎを飼うと聞いた時、怖くて仕方なかった。何度もいつか別れが来るのかと考えては心が震え、どうしてもその心が押し殺せなかった。けれど、母が「この子と過ごす時間はきつとかけがえのないものになるよ」と優しく話してくれたその言

葉に命と向き合う勇気が少しずつ湧いてきた。それでも、別れの恐怖は消えず、胸の中でずっとざわめいていた。

うさぎを迎えてある日、うさぎが全くご飯を食べなくなった。時間がたつても何も口にしくなく、母が「うさぎは常に胃腸を動かさなきゃいけないから二十四時間以上食べなかつたら命の危険がある」と言い、胸がざわざわした。祖母の犬との別れが鮮明に思い出された。あの時感じた悲しさと怖さがまた押し寄せ、涙がこぼれそうになった。大切な命をまた失うかもしれないという不安で心が張り裂けそうになった。

そんな中、私は手のおやつを握りしめて、そつとうさぎの前に差し出した。心の中で「お願い食べて」と何度も願いながら、震える手でおやつを差し出すと、うさぎはそつとその手からおやつを食べてくれた。まるで、私の願いに応えてくれたようだった。その瞬間、胸の中にずっと重くのしかかっていた不安がふつと消え、涙が溢れた。生きてくれるだけで、こんなにも嬉しいと感じたのは初めてだった。

命にはいつか必ず別れが訪れるけれど、その命とどれだけ深く向き合い、つながるか自分次第だと思う。私は祖母の犬と別れを経験し、そして今、うさぎとの新しい命を大切にしている。悲しみや不安があつても、それ以上に「一緒に生きていたい」という強い気持ちがある。これからの小さな命と過ごす時間を大切にしていきたい。そしていつか別れが来ても一緒にいられて幸せだったと心から言いたい。